特集

軽労化に貢献する生分解性資材

「キャベツとトウモロコシ栽培には生分解性フィルム（以下、生分解性）を使いますね。マルチフィルムの片付けにかかる手間と経費を考えれば十分にペイします」と語るのは茨城県八千代町でハクサイなどを中心に野菜生産に従事する猪瀬伸さんだ。野菜栽培においては保温などに効果があるマルチフィルムが欠かせない。だがいつまでも分解をしないので、回収し適切に処分しなければならない。これが生産者にとって大きな負担となっている。このため規模が大きくなればなるほど、既存のフィルムから生分解性に移行する動きが広がっている。生分解性によってフィルム回収といったきつい作業から脱却して軽労化を実現することが可能となる。

「規模拡大に欠かせない」

キャベツ栽培に導入（八千代町　猪瀬さん）

茨城県西部の八千代町は平坦で肥沃な大地と首都圏に位置する条件を生かしハクサイ生産では国内トップ。農業生産に力が入る。猪瀬さんの農業経営の概要は、秋冬ハクサイ13町歩、キャベツ4町歩、春ハクサイ5町歩。春キャベツ2町歩ほど。これにメロンが加わる。ハウスから露地へ移行しながら、タカミメロン、クインシーメロン、キンシュウメロンを栽培している。このため年間を通じて目の回るような忙しさだ。「5月の露地メロンにトーンつけをしてそれが終わった頃が一息つける時ですね。それからずっと忙しくなります」と猪瀬さん。

畑に立つ猪瀬伸さん

雪の残る畑と猪瀬さんの4トントラック

現代農業においては雑草を抑えるためや地温を高めるために各種のマルチフィルムが必要不可欠となっているが、回収の手間や処理法が農業生産者に大きな負担となっている。ここに登場したのが、微生物などの作用によって早く分解されれば場から回収の必要がなくなり、そのままほ場にすき込むことができる生分解性フィルムだ。

それだけの利点があるのならば、すぐに普及するはずであったが、普及は思ったように進んでいなかった。既存のフィルムと比較すると3倍ほどの価格が大きな障害だった。しかし、それでも確実に普及している地域もある。そのひとつが茨城県八千代町だ。

猪瀬さんはキャベツで生分解性を使っている。フィルムを撤去する時にキャベツの脇芽が絡んでしまうことがある。このため刈払機でキャベツの残根を刈り払ってからフィルムを剥がさなければならない。この作業を春キャベツ面積の2町歩で行うことになる。

耕うん、整地に使う115馬力トラクタ

「畝の長さは50㍍以上になるところもあります。刈払機をかけた後に手で引っ張って剥がしていてもキャベツの残根が残っていたりすると引っかかってしまう。そうなると生分解性にした方が楽ですよね。回収した既存のフィルムは農協に金を払って処分してもらう。これにかかる経費のことを思えば生分解性の方が良いとなってきますね」と猪瀬さんが生分解性導入の動機を説明してくれた。ハクサイではキャベツのようなことは起こらないが、トウモロコシでも脇芽が絡むので生分解性を使う。

年間を通じて多忙だが、猪瀬さんの他に家族と外国人農業研修生が農作業を行っている。各種の農業機械も必要だ。畑の天地返し、耕うんなどは115馬力と95馬力のトラクタが担当する。この他に28馬力のトラクタもあるが、こちらはハウス内で活躍する。肥料散布、防除用に使う50馬力のトラクタも2台所有する。野菜移植機もあるが、植付けは人海戦術でも行っている。

全国では農業生産者の高齢化が大きな問題となっているが、八千代町には若い担い手がたくさんいる。農協青年部のメンバーは50人ほどという。農業を辞める人もいるが、農地が空くとすぐに借り手がつくような状態だ。その結果、ますます規模拡大が進む。「農地を借りてくれという話はここでもポツポツ出ています。今の労働力ならばもう少し規模を広げることができるかもしれません」と猪瀬さん。

少しでも労力を温存しておくためにもマルチフィルムの回収撤去、処分にかかる手間は極力減らしたいと考えている。「キャベツ、トウモロコシは生分解性フィルムでなければならない」と猪瀬さん。大規模化してますます作業時間が限られる野菜生産者にとって生分解性は当然の選択だろう。

取材をしたのは、2月2日に降った雪が畑に残る頃。雪をかき分けての収穫作業が行われていた。猪瀬さんでは農協を通した契約栽培が大勢を占めているが、人手不足の時代を迎えて農産物を運ぶドライバーの確保が気になるところだと指摘した。